

目 次

原 著

| | |
|----------------|----|
| 井 本 進： 續本朝星圖略考 | 67 |
|----------------|----|

報 告

| | |
|-------------------|----|
| 佐 藤 隆 夫： 與那國日食遠征記 | 69 |
|-------------------|----|

抄 録 及 資 料

| | |
|---------|----|
| 無線報時修正値 | 75 |
|---------|----|

| | |
|--------------|----|
| Ⅲ月に於ける太陽黒點概況 | 75 |
|--------------|----|

本 會 記 事

| | |
|-------------|----|
| 通常總會及び講演會記事 | 76 |
|-------------|----|

| | |
|--------------|----|
| 昭和 16 年度會務報告 | 76 |
|--------------|----|

| | |
|--------------|----|
| 昭和 16 年度會計報告 | 76 |
|--------------|----|

天 象 欄

| | |
|-------|----|
| 流 星 群 | 77 |
|-------|----|

| | |
|-------|----|
| 變 光 星 | 77 |
|-------|----|

| | |
|------------------|----|
| 東京三鷹に於ける星の掩蔽（Ⅵ月） | 78 |
|------------------|----|

| | |
|----------------|----|
| Ⅶ月の太陽・月・惑星及び星座 | 78 |
|----------------|----|

續本朝星圖略考

井 本 進

土御門家に星圖が残つて居る筈であるが、未だ知るを得ないことを前號に於て述べて置いたのであつた。然るに偶々東日館戸田光潤氏に御會ひした時、土御門子爵家出陳の「格子月進圖」を手を取つて見せて頂くに及んで意外な事實を發見して驚いたのであつた。

其の譯けは筆者は此の星圖を既に再三拜見して居たものであつたが實は餘りにも科學的に描出せられて居るので近代の人、多分明治時代の人が書いたものと考へ殆んど問題にせず居たものであつた。夫れが圖らずも今から六百年も以前の星圖であることが判つたのである。其の星圖は安倍泰世卿の筆になるもので方眼紙の様に墨で精細に碁盤目の罫線を引き其上に星を畫いたものであつて其の一つ一つの星には夫々番號が附けられて居るのである。そして方圖には赤道を直線にて描き之に對し黃道を曲線にて表し、其の二線が交叉する二點にて春秋二分點を示して居る。

其れは陳列の都合上圖の約半分位が展觀せられ他の部分は巻き込まれて見えないものなのであつた。正しく此の星圖は我が室町時代より古くとも、新しいものでないことを知つたのであつた即ち其の星圖の末尾について居る識語¹⁾中に格子

- 1) 格子月進圖の末尾には「奎十七星也一星不見季冬日現三時隱
天文要錄云五諸侯一曰帝師二曰帝支三曰三公四曰博士五曰大史 錄云此五者爲常定欸也三家薄讚二百八十三官一千四百六十四星
大星筵百里小星卅里北斗七星間相去九千里
星三色事 黃色殷巫咸 赤色魏石申 黑齊甘德
格ニ子月進圖ニ子一夜也
クハス ヨルノ ツキノ スノ ムツ
クハス ヨルノ ツキノ スノ ムツ

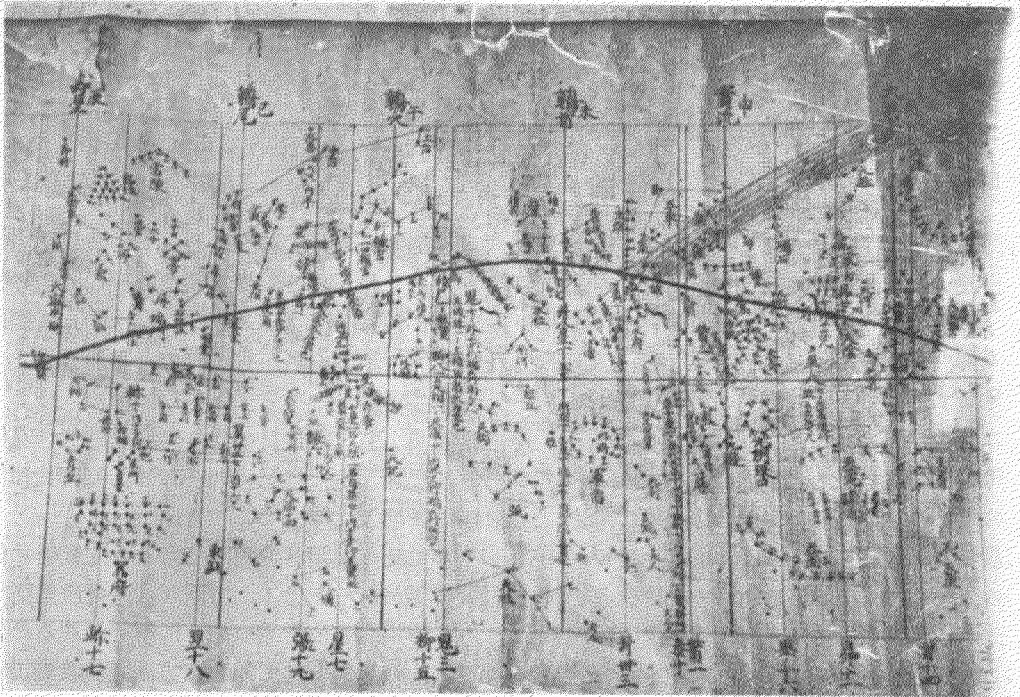
或説云——作者名也云々と記載されて居る。此處にも三家薄讚が現はれて居て三代格にあるものと書名が符合して居るのは興味深い。二百八十三官一千四百六十四星とは陳卓の撰する所の星圖の星數と同一である。星の三色は天文成象圖の表し方と同一である。

月進圖とあり、之につけられてある片假名²⁾により可成りの正確さで以て其の星圖の製作年代を知ることが出来るからであつた。卷子の裏面には「泰世」と筆者の名が書かれてある。泰世とは即ち安倍泰世卿³⁾のことで安倍氏嫡流の人である。安倍晴明より12代目に當り、鎌倉時代、花園天皇と後醍醐天皇(皇紀1968-1998)の御代に出て從四位下權天文博士であつた。

さて此の星圖が方圓圖であることは特に注目する必要があると思ふ。方圓圖は天文成象圖⁴⁾によると澁川春海の考案の如くに解せられるのであるが、此の星圖を見て始めて方圓圖は我國で春海以前にも存在したもので、必ずしも春海の考案でないことが判つて來たのである。或は春海は獨立して考案したのかも知れぬが、彼が土御門泰福卿⁵⁾などと交渉があつたことを考へると或は此の「格子月進圖」を見て知つて居たかも判らないのである。猶方圓圖は夙に支那では宋の紹聖年中(皇紀

- 2) 片假名は上記の通り格子月進圖の讀み方として附したもので「ヨルノツキノス、ムツタ、スツ」又「シクエツノス、ムツタ、スツ」と書かれてある。ヨルのルの字、シクエツのシの字などは特に室町時代以前の文字の書き方として時代を明かに表示して居るのである。
- 3) 安倍泰世は安倍晴明より第十二代目に當るが事蹟は餘りよく判つてない。只神田茂氏御編纂の日本天文史料第229頁には文保元年(皇紀1977)二月十五日の月食記事として「花園院旋記」を引き「權天文博士泰世密奏」云々の記事があり、他にも十四個所餘り同様の記録が同書中に載せられて居るので安倍泰世の時代を知ることが出來た。此點に關し神田茂氏の御指教を謝する次第である。
- 4) 澁川春海の「天文成象圖」には「曩所著之分野圖北辰爲天中開南平布爲圓圖故南方天度廣星象大而易見者難之欲人易悟而再爲方圓以明星辰宿度矣」と書いてあるが春海が創案したとは書いてないのである。
- 5) 澁川春海は土御門泰福より神道奧秘の傳授を受けたのであつて、貞享元年(皇紀2344)には京都梅小路土御門家の司天臺にて天體觀測に従事したのであつた。

第1圖 格子月進圖の一部



第2圖 格子月進圖末尾の識語

格子月進圖

星十七星也一星不見李及日現三時隱
 天文東疎五諸佳一日帝頭二日帝支三日三云
 四日博士五日大支 錄六此五者為常定星也
 三家海嶺二百八十三官一千四百六十四星
 本星運百里小星運里與終本七星間約五百里

星三色事
 黃色 殿至威 赤色 魏石申 黑 來日限

格子月進圖 子一色也
 成說一作者名也

1754-1757) 蘇頌の編した「新儀象法要」⁶⁾ 卷中の内に所収の星圖にも採用して居るから、或は此の圖法は支那から傳來して居たかも知れない。⁷⁾ 従て茲で前號の記述を少し訂正するの必要が生じた譯である。

即ち此の星圖は管見の及ぶ限りでは本邦に現存するものゝ最古のものとなるのであつて、又他方星の經緯度を方眼式に示した點は實に進歩した近代的手法であつて科學的新方式の採用であると思ふ。此の意味に於て此の星圖は誠に驚異的存在と

- 6) 新儀象法要は守山閣叢書所収の唐本であるが、同書に載せて居る星圖は格子月進圖によく似て居る點があるが、星の形とか春秋二分點の描き方などは全く同一ではない。
- 7) 格子月進圖に記載されて居る春秋二分點から年代を算出して見ると大體西暦 1100 年代となる。一方新儀象法要所収の星圖も概ね同じ年代となつて居るが、此の圖は能田忠亮博士によれば宋の元豐年中(皇紀 1738-1745)の觀測による星度と云ふことである。従て格子月進圖も大體元豐年中の觀測により畫いたものと見てよい。
- 因に、春秋二分點の内春分點の方は大體星圖の年代を指示して居る様だが、秋分點の方は何の古星圖も左様であるが、年代算出の基礎とは爲し難い程不精確である。即ち春分點より秋分點に近づくに従つて星度が不精確になつて居ると云ひ得られるのである。此の點に於て格子月進圖の秋分點は殊に不精確であつて星圖の右端に畫かれた秋分點と左端に書かれた秋分點とは食ひ違つて居り不一致となつて居る。

呼ぶべきである。星の一々に番號を附してある點など全く時代が疑はれ、うつかりすると時代錯誤に陥る位なのである。⁸⁾

従つて、此の星圖は現存の星圖中の最古のものとして又優秀なものとして前號記載の星圖總目錄にも追加せらるべきものである。

も一つ追加せられる必要のある星圖があるので茲に併せて簡単に述べることにする。

夫れは天保六年(皇紀 2495)古筆了材によつて刊行せられた「天球圖説」である。方圓圖式の星圖で澁川春海の天文成象圖と同形式のもので方圓の方には矢張分度の目盛りが附せられて居る。又春秋二分點の記載はない。圓圖の方は上規圖として北天のみが載せられて居ること之亦天文成象圖と變りがない。因に古筆了材は代々筆蹟鑑定を司る家柄の人である。此の星圖は餘り見受けないが、現在東京市平沼驛一郎氏邸内、無窮會文庫に一本を藏して居る。

(皇紀 2602 年 4 月 12 日誌)

- 8) 格子月進圖には尾宿の北の方から出て天津を通り造父、積水、天潢を経て井宿の北で終る帶狀の太い線が多數の細い墨線で以て畫かれて居るが、之は銀河を示したものであらう。之れも亦此の星圖の特長として注目せらるべき點である。

報

告

與那國日食遠征記

佐藤 隆夫

昨年九月二十一日の皆既日食に際し東北帝國大學に於ては種々の班に分れ遠征隊を組織して大陸及び琉球へ行つた。小生は加藤助教授の琉球與那國班に参加した。此班の研究目的は地磁氣地電流太陽輻射氣象要素の變化空中電氣其他である。最初吾々の班は南洋ロータ島へ行く豫定で加藤助教授が主となつて、周到なる準備が進められ一方海軍水路部の秋吉大佐殿の御好意により計畫は着實に進行して居つたのであつたが7月頃になつて水路部からロータ行は中止したが良からうとの親切なる忠告に接し豫て心配してゐた事ではあつたが時日は切迫して居るし一同大いに困惑した次第

であつた。其時松隈教授が石垣島の農學校を紹介しようとの助言があつたが一行は事情によりそこに行く事は止めた。然し乍ら吾々としては研究だけの都合から云つても大陸は好ましくなく海上の小島を望んで居たので兎に角琉球で而も皆既帯に入り其上ハブや悪疫の無い所と云ふ多くの條件を満足する所を探した所が幸ひに在つた。これ即ち表題に掲げたる與那國島であつてこの島は東北大地質教室半澤教授の視察に依れば地質大古に於て一旦海中に没し再び隆起したのでであると云ふ。そこで此等の動物は死滅し其後も離れ小島の事故移住もなく今日に及んでゐるのであらう。斯くして

この島に決めたのであるが吾々一行の中誰一人としてこんな島は名さへ知らなかつた。兎に角米やら罐詰やら準備萬端調へ大小 70 個餘り 2 噸半の荷物を發送したのが 8 月頃であつた。而も荷物は基隆まである、其先は未だどうするか決つてない。臺灣東海岸の蘇澳から水路部に小舟を出して貰はうかとの方針もあつたが兎に角臺灣まで行つてから決める事にして運命を天に任せたる心境を以て仙臺を發つことにした。一行は加藤助教を先頭に小生助手一人學生一人の僅か四名である。小生のみ都合に依り他の人より一日早く 8 月 23 日夜行で汽笛一聲仙臺を出發した。此御蔭で天命立所に下り持て餘してゐた二噸半は見事解決とはなつた。明れば既に東京である、東京の暑さに驚きつゝ一路神戸に向ふ。車中は輕装なる白一色である、見渡すと三ツ揃の背廣等着てゐるのは小生 1 人だ。圖南の雄志を抱いて南下せる北國の若人と一般人ではあるがそれにしてもあまりに對照が判つきりしてゐるではないか。丁度向側に坐つた人と知り合ふ事が出來た。此の方は基隆丸三産業株式會社監査役山崎義彦氏で與那國の事情に詳しく吾々が最も心勞して居た基隆から與那國への船の事やら與那國へ行く人の爲の旅館やらに就き種種御教示下された。8 月 26 日一行は初めて神戸にて一緒になり正午出帆の郵船香取丸の客となつた。この船は 1 萬噸級の舊式船ではあるが東北大中村先生が岡田武松先生と共に洋行なされた際御乗船のものであると云ふ、奇しき因縁ではある。早速一行に車中での幸運を話し大安堵させたわけである。鉢伏山、六甲の山々も段々霞む頃には黃褐色から綠色更に青色と海水は變化し如何にも外海へ出た事が窺はれた。船が室戸岬を過ぎ土佐沖へ出た頃にはもうすつかり夜である。こんな豪華船に眠るのは初めてであるが船が軽く揺れるのが恰も搖籃の如く作用したゝめかぐつすり第一夜を休む事が出來た。翌朝甲板に出て見る。船は今宮崎縣の沖を通つてゐるのだと云ふ。海軍士官ならざる一行は陸上に聳ゆる山々を名を呼ぶ事は出來ないが海はと見れば正に黒潮躍る南海である、黒紫色の海水を蹴立てゝ一路南下してゐる。あまり天氣は良くない晝頃から大いに荒れ視程は零となつた。翌日雨は止んだが船は矢張相當揺れる。既

に吐喝喇列島の西に出て居る。船の中の生活もこれで 3 日目であるが毎日毎日の洋食には全く閉口した。日本食が榮養學的に眞理であるか否かは知らないが矢張傳統だ傳統だ、氣分を悪くしながら日本人の誇りを感じたわけである。翌 29 日愈、本日上陸かと思ふと氣分もはづむ。海は比較的風いである、既に低氣壓の圏外へ出たのであらうか。船は豫定より 6 時間位遅れてゐる。海中に屏風の様に突立つた眞赤な島が見え出して來る頃空には白い鷗が飛び廻つてゐる。午後 4 時頃彭佳嶼の白い燈臺を左舷に眺めつゝ蓬萊島愈。近きを思はせる。日没頃本島をはつきり見ることが出來た。先づ以て吾々はその地形の奇異なるに目を瞪つた。大屯山はと見ればあゝ成程矢張雲がかゝつてゐる。此附近は夏の南西季節風がこの山に打突る爲であらうあまり好天氣に恵まれないと云ふ。富貴角等へ行かないで善かつたと語り合つた。愈、入港である、南蠻的な小船が浮んでゐる。岸壁へ着くや否や加藤さん加藤さんと呼ぶものがある、忽にして新聞記者に取巻かれて終つた。背中や腕に一杯重い荷物を託して長廊下を通り抜ける時の暑さと云つたらいくら臺灣にしても想像外の事であつた。誠にこれは關口先生の云はるゝ通り“上陸第 1 歩の試練”であつた。早速山崎氏に紹介された旅館肥後屋に到着く、主人に聞けば月に 1 回か 2 回出る不定期船が丁度明後日出ると云ふ。吾々はあまりの好都合さに欣喜雀躍した。豫約の爲基隆郵便局前の岸壁に碇泊してゐる所へ行くと漁音丸と云ふ、46 噸の小舟である。船員に交渉したがさつぱり言葉が通じない。初めは臺灣人かとばかり思つたがこれが吾々が最初に逢つた與那國人であつた。承知したらしいので歸つて來た。臺灣の第 1 夜を充分休んで翌日の活動に備えた。翌朝早速丸通へ行き荷物の引渡しを申越むと“せんだい”からなど荷物は來てゐないと云ふ、一同ひやりとした、よくよく確めると臺灣にも“せんだい”と云ふ所が在るとの事。内地の仙臺からの既に到着して倉庫に納つてゐるとの事、これで大安心した。荷物の積込やら港務所への挨拶やらで多忙に過して夜は基隆市内を見物した。治安の保たれた中であつて支那らしき數々のものが觀察出來たのは愉しかつた。翌日眼が醒め

て見て驚いた。新聞に吾々日食観測隊のことがでかかど掲げてある。小生は一夜にして臺灣札にさせられて終つた。愈、本日出港である。午前中臺北へ行き文教府圖書館長山中樵氏、官吏齋藤庄治氏、官吏元與那國小學校長比嘉氏に面會種々懇談の後辭去し總督府氣象臺へ行く。臺長西村博士に會ふ。窪川さんは水澤の服部さんを出迎への爲基隆へ行き不在であつた。西村氏の云ふにはバシ-海峡に颱風がある、進路如何に依つては臺灣東海岸は可なり荒れるだらうとの事、三貂角の沖合には小舟がごろごろ海底に沈んでゐるとの話には一同ひやりとした。兎に角基隆へ戻り郊外の港から乗船したのであるが船長に颱風の話をするると氣象通報には耳を傾けた事はない空を眺めこの晴雨計で判断すれば充分であるには頼もしい様な心細い様な氣がした。見れば成程汚い船長室にはアネロイドが1個据附けられてゐる。一同46噸の小舟に一夜の生命を託したのであるが香取丸から漁音丸へこれ亦物凄しい對照である。石炭と客を一緒に詰込んだ船は出帆後間もなく進路を南に取り東海岸に沿ふて蘇澳の近くまで南下しそれより進路を東に變へた。其頃にはもう夜の帳はすっかり下り月光に映ゆる銀波の中をポンポンと音を立てながら一路夢の國を指して進んだ。航海は平穩そのものであつた。翌早朝眼醒めて見る波にぼつかり浮く伽の國の様な小島、これが與那國だ、島の西端久部良の沖に碇泊した。龍宮城を彷彿させるやうな海中が手に取る様に見える、此邊は日本近海の中で最も透明度の大きい所であると云ふ。艇で一先づ上陸し同船の客の一老人の家に朝食を御馳走になつた、見ればちやんと御飯である。米等全く無く甘藷を常食としてゐるとばかり思ひ込んでゐた吾々は不思議に思つて問ひ正すと米は1年に二度取れ輸出してゐる位である。與那國へ米等持つて來る人がありますかと宥められ大笑ひした。小憩の後本船に戻り祖納の港から上陸一先づ旅館に落着く。9月1日愈、今日から與那國生活が始るのである。早速村役場國民學校へと挨拶に廻つたが突然の珍客に如何にも驚いたやうに見えた。來島の次第を告げると村の先生は石垣島に日食のある事は聴き及んで居ましたが與那國にもあるのですかと云つて驚いた。それを聞いて吾々は一層

驚嘆した。吾々の行くまで日食のある事を知らなかつたのである。そして規模の大きい事や滞在期間の永い事を聴くに及んでこの島には斯様な事は先にも後にもこれ1回切りでせうと感心して居た。觀測地の選擇に取掛り新校舎の運動場と決定翌日より建設に着手した。次から次へと組立式小屋が建てられて行く。荷物を解いて見ると檢流計電壓電流計熱電對時計、自記ミリボルトメーター其他色々おおよそ破損を免れたるもの殆どなしと云ふ状態であつた。積み下しの回数の多かつた爲致し方のない事であつたが幸ひにも加藤さんは卓抜なる技術を以て全部修理して下されたのには全く感謝に堪えない次第である。初め十日間位は毎日の好天氣で灼熱の太陽は頭から照りつけた。勿論此島は亞熱帯ではあるが海洋性氣候の事故大して暑くはないだらうと思つてゐたが全くその酷暑と云つたら島の人さへも日中は日射を避けて外へは出ない位で夕方になつたりスコールが降つたりすると初めて出て來ると云ふ有様であつた。然し夕方1日の勞苦を終へ一同打揃つて波多濱の海水浴に打興すれば涼味萬斛日中の炎熱にこそ却つて感謝したい位の氣持ちになる。風呂は村長の御好意に依り同家のに入れて貰つた。大きな五右衛門風呂浴場の解放的な事とても北國では見られない所である。根も枝も錯雜に密生した熱帯樹を眺め乍ら浸つてゐると南國なるかなの憶ひを深くする。吾々は此處を仲嵩温泉と稱し滞在中愛用させて戴いた。この島は領臺前までは實に日本の最西端に位してゐた所で時差は中央標準時より48分も西である。従つて7時半頃まで明るく而も日が没したとなると忽ちにして暗くなり薄明の時間と云ふものがあまりない。夜の空を眺めれば北辰は遙か斜に指し、白鳥座等は倒になつて北天に輝きオリオン亦殆ど天頂を通る等内地とは著しく趣を異にしてゐる。遙か彼方の海上には積亂雲や塔狀雲が四つも五つも並んで浮んで居るのも珍らしい。兎角する間に時日は益々切迫して多忙になるし旅館からの往復も大變なので校長先生の御好意に依り校舎の教室を一つ解放して貰ひそこに泊ることにした。第一夜に見舞はれたのはやもりの合唱と月夜に浮かれ出す村の青年男女の喧騒、あゝ餘りにも南國的である。食事は民家にて濟ませる

事にした、食物に關しては吾々一同大いに杞憂して居た所であつたが來て見ると全く其豊富なのに一驚した。豚牛鶏魚卵等完全な自給自足體制である。が唯野菜のみは不足してゐる様であつた。果物はバナナを風味し甘蔗をかぢる事が出來た。夕食の鰹の刺身の美味なる事これが榮養分の少い黒潮に育つた魚かなと不思議に感ずるのは筆者のみではあるまい。料理は支那の影響を受けてゐるらしく肉食を主とし朝食の味噌汁の中へ油を入れたり萬事油を用ふる習慣がある。9月10日過頃からは天氣も曇り勝となり暑さも幾分凌ぎ良くなつた。颱風の影響もあつたがとにかく夏から秋への天候の變移は成程不連続的である。大陸の冷氣塊が發達して南方高氣壓の勢力が後退したのであらう。さりとて云へ地磁氣地電流の變化を光學的に自記させる暗室の中は矢張蒸風呂である。黙々と數十分間の調正の後出て來られる加藤さんの姿は流汗淋漓位では到底形容出來ないものがある。吾々は其自ら進んで困難に打突つて行かれる眞摯なる研究態度には幾度か感動させられたのである。若し斯る場合にスコールでもあれば正に天佑である。小生も天佑満喫の御相伴をするのであるがうつかりすると體が押潰されさうになる、全く物凄しい上昇氣流の產物と云ふべきだ。とかくする内日食當日も一週間位に迫つた頃には既に準備萬端は出來上つた。全天輻射自記装置も動いてゐる。之は島津製作所式のもの破損したる爲自記時計のドラムに齒車は無くとも柱時計と連結して三分毎に記録する様に加藤さんが考案されたものであつて前者よりも遙に優秀なものである。熱電對も強烈な日射の爲焼け切れる事も懸念したがその事も無く幸ひであつた。直達自記日射計は中村先生と小生の設計に依り本學工場にて製作せるもので赤道儀式に熱電對の入つてゐる圓筒を太陽の方向に向け氣象自記時計に依つて廻轉させる装置である。之を檢流計に繼いで振れを讀取るのであるが日食に適應させる爲尺度の所には點滅自在の豆ランプを付け又抵抗を連続的に變化させる様にした、之も加藤さんの考案である。之に依つて太陽輻射の變化及びコロナの光度測定をやらうと云ふ目論見である。全天輻射の絶對測定は日食時に於ては迅速を必要とする事當然であるので装置

の中の切換スキッチの今迄二つであつたものを一つに統合させた。これは小生の考案である。當日の部署は大體次の如くに決定された。加藤助教は直達日射計、小生は全天輻射及びスペクトル、齋藤助手は地磁氣垂直分力の測定及びコロナの寫眞撮影、佐々木學生は空中電氣、其他は村の先生に御願した。準備は完了したが心配なのは近頃の天氣である。仲々恢復しない。石垣から來る海南時報を讀むと東京天文臺長關口先生も大分氣を揉んで居られるらしい。臘氣乍ら寫眞に依り先生の御姿を拜した時には郷愁を感じたのであるが先生の談として斯る時局に於て安心して研究に精進出來る事に對して天の恩國の恩に感謝しなければならぬと云ふ意味の事があり吾々一同大いに激勵されたのであるが今日の時勢に於ては一層その至言なるを痛感しなければならぬと思ふ。當日は遠慮無く近寄つて來る。吾々の日食の記事が村役場に依つて墨一枚位の大揭示となつて村の辻々に現はれた。喚き立てたのは村民である“天の事が人間等に解る筈はない”と。村長宅はじめ村の有識者からの菓子やバナナの慰問品が室中一杯飾られる様になつた。正に與那國全村擧げて緊張の坩堝である。

遂に當日は來た。昨日より天氣は悪い。早朝は好天氣であつたが西空に見える波狀雲が氣に懸る、案の定臆てこれが吾々の頭上に擴つて來た。然し小生は滿々たる自信を以て成功を疑はなかつた。第一接觸前一寸雲は薄らいだが遂に時刻はとれなかつた。既に其頃吾々は警防團や有識者の緊張せる顔々に取巻かれて居た。墓石や宇良部山麓高原に白旗を翳して頑張つてゐる村民の集團も居る。とかくする中積雲も過去り青空の中から望む太陽は既に三日月形である。あたりは急に暗くなるが夕方の風景とは全く違ひ人の顔でも何でも黄味を帯びてゐる。卷雲が少々ある様だ。然し至誠は遂に天に通じ皆既前後30分間は先づ先づ心配のない晴天であつた。豫定の仕事は八分通りは成功した。御互に成功を祝しつゝも石垣はどうだつたらう矢張こんな天氣だつたに相違ない、漢口の松隈先生、南京の中村先生、北京南昌哈爾賓はどうであつたらう等と案じ合ひつゝも今迄の苦心を勞ひ合つた。村中日食の興奮未だ冷えやらぬ翌日

數々の珍聞に接した。或人が昨日は大變綺麗な物を見せて載き有難う御座いましたと御禮を述べて行つた。吾々一行が日食を作る機械を持つて來てそれを仕掛けて見せて呉れたと思つたらしい。或人家では父は今日は日食だからと云ふので朝からランプ掃除に忙しく子供に暗くならぬ中に急いで仕事を成し終へる様に急立て母はこれが2分間位ならよいが一日も續いたらどうしようかと云つて心配して居たと云ふ。或人は庭に仕事中急に暗くなつたのでそれつ夜になつたとて慌て、放牧中の馬を連れ戻さうと山に駈上つた途端にば一つと明るくなつたと云ふ。村一の舊家の一老人は吾々の名譽を祝しつゝ語るには若し先生方の云ふ通り日食が起つて呉れなかつたら氣の毒だがとそればかり案じてましたと。郵便局長は石垣測候所からの通知に依る豫報時刻と吾々のとが二三分異なるので何方が正しいか半信半疑であつたと云ふ。然し前者のは石垣の豫報である事が解つた。實は吾々が豫報を下すのに一番困つたのは島の位置である。この島の位置は西表島から持つて來たもので日本の陸地測量網の最西端に位し、臺灣は獨立の測量であるから最も誤差が大きいと考へられる。接觸時刻の觀測から逆に地點の經緯度を決めてやらうか等と意氣な事を考へたりもした。

村の國民學校生徒の日食時に於る氣象動植物の觀察の鋭さには大いに敬服した。合歡木が夜の生態に成つたとか鶴が盲になつて轉ぶ様にして庭の一隅に集り蹲つたとか海岸の岸邊に小魚が澤山寄り集つて來たとか更に又影が西から東へ移動し冷風が影の方から吹いて來る等は日食の全般を良く把握したものであらう。名残を惜みつゝ引揚準備のどンドン進行する中一日村役場の主催で吾々の爲に全村擧げての大歡送會が開かれた。折角此處まで來て載いたのであるから何か印象に残るものをと云ふのである。蛇皮線に合せて踊る上口説、下口説、鳩間口説、天川踊、松竹梅、鶴龜、琉裝の踊其他を觀賞させて載いて十六ミりに納めたのであるが各部落毎の競演よろしく吾々の拍手の工合に依つて部落民は一喜一憂すると云ふ歡待ぶりはつと吾々は浦島太郎に成るのではないかと疑つたに、た位である。

歸途何れの途を選ぶかは全く船の都合如何に依

る。所がその船が臺灣からも那覇からも仲々來ない。いくらすつかり與那國人(ドナント)になり切つた吾々でも無鳥郷の蝸蝓然と納つてゐるわけにも行かない。善し、島中の山野を跋涉してやらうと衆議一決。先づ豫てから島の怪奇として聴き及んでゐた宇良部山麓洞穴中に在る屋島墓の調査に出かけた。途中田を耕す牛を操る農夫のあまりにも異國的な情景を眺めながら密林を踏分けやつと辿著いて見て驚いた。土臭い洞穴の中にはこれは又何と頭蓋骨四肢の骨納棺やら甕陶器等の破片が一面に散亂してゐる。一説にはこれは平家の流人の隠遁所であつたと云ひ又は海賊の住家であつたとも云ふ。そこで吾々は珍しくもよく調つてゐる大甕其他を持ち歸る事にした。之は決して單なる酔狂ではない。交通不便なるこの離島に學者の訪れる事もない現状に鑑み此機會に島の歴史や民族學上又は考古學上何等かの參考になればと思つたからである。讀者は茲に於て地球物理の研究範圍の廣いのに感嘆せられるであらう。歸つてから二高阿刀田校長に鑑定を御願する事にして下山した。

此島を地質學的に觀察すると仲々面白い。東の宇良部岳と西の久部良岳は勿論第三紀層であるがこれを取巻くものは隆起珊瑚礁である。そして表面は風化して紅土となつてゐる。犬邪原と云ふ高原の末端には昔の海蝕崖が絶壁をなして聳えその横に穿たれた大きな波蝕窪らしいものの中を吾々は自由に往來した。更に又海岸段丘の發達を探勝する爲“三人の臺”と云ふ所へ出掛けた。4軒の行程を東海岸へ亞熱帯らしい植物景觀を眺めながら進む中一面蓬々たる草原に迷ひ込んで終つた。よく見るとこれは昔の田圃で、この島は未だに原始移動農業の域を脱してゐないのである。従つて收穫遞減の法則に頭を悩ます必要もないわけだ。やつと奇勝三人の臺に辿り著いた。幾重にも發達した段丘を馳下り遙かに西表島の霞む海を背に仰ぎ見れば其壯觀古代羅馬の城跡もかくやと思はれるばかりであつた。加藤さんは岩石の磁氣的性質の研究續行の爲ハンマーを持つて熱心にやつて居られる。ふと絶壁の下に魚の大群の游泳するのに魅惑を感じ下り立ち岩の上を巧みに跳びはねてゐる“樹に昇る魚”らしいものを觀察し仕事熱心

の加藤さんを羨しがらせた。

やつと那覇から金榮丸と云ふのが来た。所がこの金榮身の程を知つて仲々出帆する勇氣がない。そこで今度は校長先生の御案内で地磁氣測量及び蝶採集旁々島廻りに出掛けた。山を越えて島の南端鬚川へ行き分教場から與那國蛾の標本を載き更に久部良へと道を進めた。廳て南西に傾斜せる廣場に出た、此は明かに昔の海蝕棚であつてこゝにも陸地の隆起を明瞭に觀取することが出來静止後前面に生じた海蝕崖は絶壁となつて現在に及んでゐる。蘇鐵や榕樹の林の中を燦々たる陽光を浴びて嬉々と戯れ遊ぶ羊や馬の群、周圍七里のこの孤島にかくも雄大にして詩的な平和な情景が見られるのかと訝つた位である。半ば猪のやうに野性化した豚まで放牧されてゐる。久部良の國民學校は一部は茅葺の民家を教場に充てゝゐる。これは先年校舍倒壊と云ふ颱風の襲來に見舞はれた結果であつてその際前面の沼は水が全部吹飛ばされて干上つたと云ふ、以つて其暴威を窺ふ事が出来る。颱風に對する適應として此島の民家の構造は實に興味がある。二階建の家等一つもなく瓦は割れない様に全部密着させ部屋の中にさへ柱の立つてゐるのもある。垣は大抵珊瑚を積んだ堅牢そのものの石垣である。目映いばかりの月光を浴びて一路祖納へ歸つた。

到頭10月に入つてしまつた。10月にもなれば與那國にも温帯性の雨が降る。やつと船が明4日出ると云ふ待望の知せに吾々は勇躍して荷物の積込作業に取掛つた。校長先生が高等小學の女生徒を動員するからと御好意を示されたが吾々はそんな事は初め全く問題にしなかつた。然し自信たつぷりの御申出に依り遂に頼んで見ることにした。頭に手拭を載せて來た可愛い女生徒は大人二人で擔ぐ位の荷物を片端から頭にのせ重心をとつたと見るや悠々と龍舌蘭の繁る道を港の方へと消え去つた、之には一同感嘆の聲暫し。然し流石に荷物を下すと血液が一時に頭に逆流してくらくらつと眩するさうである。

愈、4日吾々は萬感交々包み切れぬ喜びを以て身支度を調へ挨拶廻りを済ませれば午後4時の出帆に既に港はざはめきたつてゐる。校長先生始め職員、村長夫人(村長殿は那覇へ行き留守)、有識

者、村民の御見送りである。回顧すれば吾々が滞在中村民から受けた印象は淳朴にして穏和なることに盡きる。琉球國人は未だ嘗て戦争の何たるかを知らぬと云ふ事を聞いて驚いた。ナポレオン一世はそれは不可能だと云つたと云ふ逸話がある。もう一つ知らない事は傳染病と結核であるとは村長夫人の談である。げに與那國は天然の樂土歌と踊の國、満潮に乗つて愈、出帆 互に帽子や手拭を振りつゝ別離を惜むの情酣なる時船はがたとと暗礁に乗上げて終つた。陸の人も船の人も其儘引込むわけにもゆかず互に相對峙したまゝ數十分更めて別離を遣直したのは滑稽であつた。暗礁を縫ひつゝ船は一路基隆へと向つた。西に夕燒東に明月の空、握飯を食べつゝ話は島の風俗習慣言語歴史傳説と盡きる所を知らなかつたが遂に甲板の上に張つた天幕の中に潜り込んだ。夜中の雨に目醒れば頭から足までのづぶ濡れに光榮ある苦難と其儘跳起き船尾の魚釣りを眺めて時を過した。色は濃緑形はおよそ魚等とは云はれさうもない奇妙な奴が釣れて來た。

基隆へ着いても心配になるのは又船である、内臺航路は満員や缺航の爲適當なのがない、丁度其時1月に1回何處からともなく漂然と來り何處へともなく漂然と去る幽靈の如き船に出會つた。之が吾々を明後日兎に角鹿兒島まで運んで呉れると云ふ事だけがわかつたので喜んで其に決めた、大阪商船の河南丸(2600噸)と云ふ貨物船であつた。翌日新北投温泉へ行き一日休養、其ラヂウム含有量の豊富なる事手拭に二三日間温泉の香がただよつてゐる位であつた。10月7日臺北へ立寄る。其輕快なるバスに完備せる鋪裝道路、官廳の建物や公園等の華美なる事は矢張植民地らしい。博物館を見物して夕方河南丸にて一路懐しの内地へ向ふ。船は大分揺れるが客も少く至極のんびりして氣持が良い。10日になりやつと島らしい島が見えて來た、霞の中から次から次へと現れては後ろに消える。煙を吐く硫黃島、海岸から聳え立つ開聞岳の壯觀を眺めつゝ棒振沸く雨水を飲んで數十日よくも生きて歸つて來たものと欣び合つた。灣内へ入れば打つて變つたやうに靜かな海、やがて櫻島を右舷に船は夜入港した。翌日鹿兒島見物後別府に向ふ、地球物理學者此處を素通りす

る事は出来ない。市内に電車のあるのは温泉の境地を損ふ事夥しい。別府にて遠征隊は解散、小生は福岡へ向つた。福岡と鹿児島とは氣候の差異が甚しい。麥藁帽子に眞夏の輕装、眞黒な顔の凱旋士は往路とは正反對の對照に面食つた。福岡管區氣象臺へ行き臺長須田博士、北岡技師に面會久闊を恕し懇談種々御好遇を受け本遠征に有終の美を與へられたる事を感謝しつゝ本州に向つた。

末筆乍ら與那國滞在中吾々の爲に多大の理解を賜はり且終始變らざる御支援と御厚情を忝うするの光榮に浴したる事に對し村長、校長、職員一同、村民各位に衷心より感謝の意を表し各位の御多幸を祈ると同時に滞臺中種々の御配慮を煩したる官吏齋藤庄治氏、比嘉氏、山中樵氏、旭重雄氏等の諸氏に深謝する次第である。(完)

抄 録 及 資 料

無線報時修正値

東京無線電信所(船橋)を経て東京天文臺より放送した今年3月中の報時修正値は次の通りである。學用報時は報時定刻(毎日11時及21時)の5分前即55分より0分までの5分間に306個の等間隔の信號を發信するが、此の修正値はそれら306個の信號の内約30個の信

號を測定し、平均したるもので、全信號の中央に於ける修正値に相當せるものである。

分報時は1分より3分まで毎分0秒より半秒間の信號を發信するが此の修正値はそれら3回の信號の起端に對する修正値を平均したものである。次の表中(+)は遅れ(-)は早すぎを示す。(東京天文臺)

| 1942 | 11 ^h | | 21 ^h | | 1942 | 11 ^h | | 21 ^h | |
|------|-----------------|------|-----------------|------|------|-----------------|------|-----------------|------|
| | 學用報時 | 分報時 | 學用報時 | 分報時 | | III | 學用報時 | 分報時 | 學用報時 |
| 1 | -.100 | -.10 | -.078 | -.08 | 16 | -.022 | -.02 | -.018 | -.01 |
| 2 | -.043 | -.05 | -.028 | -.03 | 17 | -.002 | +.01 | -.009 | .00 |
| 3 | +.007 | +.02 | -.009 | .00 | 18 | -.061 | -.05 | -.002 | +.01 |
| 4 | -.011 | -.01 | +.009 | +.01 | 19 | -.032 | -.03 | -.026 | -.01 |
| 5 | +.015 | +.02 | -.016 | -.01 | 20 | -.024 | -.06 | -.009 | .00 |
| 6 | -.008 | -.04 | -.071 | -.06 | 21 | +.134 | +.14 | -.336 | -.34 |
| 7 | +.004 | +.01 | -.124 | -.12 | 22 | -.020 | -.01 | -.011 | -.01 |
| 8 | +.094 | +.10 | -.011 | -.01 | 23 | -.026 | -.02 | -.012 | .00 |
| 9 | -.008 | .00 | +.013 | +.01 | 24 | +.012 | +.02 | +.033 | +.04 |
| 10 | -.085 | -.08 | +.133 | +.15 | 25 | +.030 | +.04 | +.029 | +.04 |
| 11 | +.020 | +.03 | +.008 | +.02 | 26 | -.035 | -.03 | -.047 | -.03 |
| 12 | +.046 | +.05 | +.063 | +.07 | 27 | -.052 | -.05 | -.043 | -.04 |
| 13 | -.082 | -.07 | -.021 | -.02 | 28 | +.038 | +.04 | -.004 | +.01 |
| 14 | +.005 | +.02 | +.038 | +.05 | 29 | -.003 | .00 | -.007 | -.01 |
| 15 | +.043 | +.05 | -.009 | -.01 | 30 | -.038 | -.04 | -.030 | -.02 |
| | | | | | 31 | -.041 | -.04 | +.022 | +.02 |

III 月に於ける太陽黒點概況

| 日 | 黒點群 | 黒點數 | 概況 | 日 | 黒點群 | 黒點數 | 概況 |
|----|-----|-----|------------------------|----|-----|-----|-----------------------------------|
| 1 | 6 | 108 | 二月末出現の大黒點中央にあり依然として大黒點 | 17 | 2 | 25 | I, II 變らず |
| 2 | — | — | 雨, 觀測なし | 18 | 4 | 36 | I, II 變らず, 他に東部に2個の小黒點 |
| 3 | 4 | — | 曇, 觀測なし | 19 | 6 | 41 | I 減少, II 増大, 他に東部に4個の小群(III) |
| 4 | 2 | 38 | 大黒點西部に近づき減少 | 20 | 6 | 66 | I 西部にて減少, II 變らず, III 増大 |
| 5 | — | — | 雨, 觀測なし | 21 | 5 | 100 | II, III 共に増大東部賑やか |
| 6 | 4 | 25 | 大黒點西邊に近づき減少 | 22 | 7 | 117 | II 變らず, III 中央部に近づき變らず, 東部に新群(IV) |
| 7 | — | — | 曇, 觀測なし | 23 | 8 | 123 | II, III 變らず中央部賑やか, IV 増大 |
| 8 | 2 | 7 | 東部と西部とに各1個の小黒點群 | 24 | — | — | 曇, 觀測なし |
| 9 | — | — | 曇, 觀測なし | 25 | 7 | 104 | II, III 共に稍々減少, IV 増大 |
| 10 | 0 | 0 | 黒點無し | 26 | 9 | 99 | II, III 西部にて變らず, IV 更に増大 |
| 11 | 1 | 4 | 東邊に近く1個の小黒點 | 27 | 5 | 51 | II, III 更に減少, IV 變らず |
| 12 | 0 | 0 | 黒點無し | 28 | 3 | 39 | II 西邊に隠れ III 大部分消滅, IV 變らず |
| 13 | 3 | 9 | 東部に3個の小黒點 | 29 | — | — | 曇, 觀測なし |
| 14 | 2 | 22 | 中央部(I)と東部(II)とに各1個の小黒點 | 30 | 4 | 41 | IV 變らず 多數の小黒點群よりなる |
| 15 | — | — | 雨, 觀測なし | 31 | 4 | 53 | IV 西部にてたいして變らず |
| 16 | 3 | 31 | I, II 變らず | | | | |

使用器械, 觀測方法等については本誌第31巻第4號第77頁參照

本 會 記 事

通常總會及び講演會記事

昭和 17 年 Ⅳ 月 26 日午後 1 時より三鷹町東京天文臺に於て通常總會を開催し、理事長關口鯉吉氏司會の下に次の如き議事を審議した。出席者約 20 名。

- I 昭和 16 年度會務報告。水野理事より説明（詳細別項）あり、満場異議なく承認さる。
- II 昭和 16 年度會計報告。野附理事より説明（詳細別項）あり、満場異議なく承認さる。
- III 評議員半数改選。定款第 19 條及び第 20 條に従ひ任期満了となりたる評議員の改選を行ひ、評議員會（Ⅲ月 7 日開催）の推薦通り次の如く決定した。再選されたる評議員

荒木 俊馬君 上田 穰君 小野澄之助君
 神田 茂君 國枝 元治君 桑木 或雄君
 關口 鯉吉君 早乙女清房君 田中 務君
 田中館愛橋君 長岡半太郎君 橋元 昌矣君
 福見 尙文君（以上 13 名）

新たに評議員に選舉されたる者

高嶺 俊夫君 妹澤 克惟君（以上 2 名）

總會終了後暫らく休憩の後、午後 2 時より講演會に入つた。先づ荒木俊馬君座長に推され、その司會の下に次の二講演が行はれた。

- I 太陽大氣の二三の問題 一柳 壽一君
 - II 黄道光の話 古畑 正秋君
- 聴講者約 40 名。

昭和 16 年度會務報告

昭和 16 年度（昭和 16 年 Ⅳ 月 1 日より昭和 17 年 Ⅲ 月末日迄）は創立第 34 年度にして社団法人設立後第 8 年に當る。

I 事業

(イ) 出版

- (1) 天文月報第 34 卷第 4 號より第 12 號まで及び第 35 卷第 1 號より第 3 號迄を發行す。
- (2) 日本天文学會要報第 6 卷第 3 册（第 23 號）を發行す。

(ロ) 講演會

- (1) 昭和 16 年 Ⅲ 月 19 日三鷹町東京天文臺に於て開催、講演者 2 名、來會者約 30 名。
- (2) 昭和 16 年 Ⅺ 月 1 日三鷹町東京天文臺に於て開催、講演者 3 名、來會者約 60 名。

(ハ) 天體觀覽會

昭和 16 年 Ⅺ 月 1 日三鷹町東京天文臺に於て開催、來會者約 300 名。

II 會務

(イ) 總會

昭和 16 年 Ⅳ 月 19 日三鷹町東京天文臺に開

催、昭和 15 年度の會務及び會計報告、彗星發見者の表彰、理事長副理事長の改選、並びに新理事長の指名による新理事の任命あり、直ちに承認を受く、來會者約 20 名。

(ロ) 評議員會

- (1) 昭和 16 年 Ⅳ 月 10 日麻布區飯倉町東京帝國大學天文學教室にて開催、科學技術聯合會より申越の件、並びに昭和 15 年度會務及び會計報告につき審議す。

議長 本田親二氏、出席者 13 名。

- (2) 昭和 17 年 Ⅲ 月 7 日麻布區飯倉町東京帝國大學天文學教室にて開催、昭和 17 年度豫算の件、並びに評議員半数改選及び補充の件を審議す。

議長 國枝元治氏、出席者 9 名。

(ハ) 主要事務事項

- (1) 昭和 15 年度會務及會計報告提出（4 月）
- (2) 理事變更登記（Ⅳ 月）
- (3) 出版文化協會に入會（Ⅴ 月）
- (4) 彗星發見者岡林滋樹氏に服部天體發見賞を本田實氏に記念品を贈る（Ⅴ 月）
- (5) 昭和 17 年度豫算案提出（Ⅲ 月）

III 役員及會員移動

(イ) 役員の改選

昭和 16 年度にて満期となれる理事長、副理事長は改選され、新理事長の任命によりて新たに就任したる理事次の如し。

理事長 關口 鯉吉氏
 副理事長 萩原 雄祐氏
 理事 藤田 良雄氏 廣瀬 秀雄氏
 畑中 武夫氏 大澤 清輝氏
 野附 誠夫氏 水野良平氏(留任)

(ロ) 年度末會員數

昭和 17 年 Ⅲ 月末日現在の會員數は總計 645 名にして、前年度末に比し 72 名の減少なり。

IV 雜誌寄贈關係

毎月寄贈せるもの 48
 寄贈を受けたるもの 28

昭和 16 年度會計報告

(イ) 收入

| | 円 |
|--------|---------|
| 會費 | 1578.60 |
| 月報豫約販賣 | 428.66 |
| 月報委託販賣 | 274.01 |
| 月報直接販賣 | 57.94 |
| 要報販賣 | 27.26 |
| 利子 | 338.71 |

| | |
|------------|-----------|
| 寫眞販賣 | 197.14 |
| 印 稅 | 534.70 |
| 雜 收 入 | 3.90 |
| (小 計) | 3440.92 |
| 前 期 繰 越 | 8086.41 |
| 合 計 | 1,1527.33 |
| (ロ) 支 出 | |
| 月報調製費 | 1738.81 |
| 要報調製費 | 275.30 |
| 事務員俸給 | 110.00 |
| 別 刷 費 | 77.57 |
| 謝 金 | 64.30 |
| 定 會 費 | 48.98 |
| 送 料 通 信 費 | 223.30 |
| 寫眞調製費 | 49.91 |
| 物 品 費 | 75.83 |
| 雜 費 | 83.65 |
| (小 計) | 2747.65 |
| 賞金(服部資金より) | 100.00 |
| 後 期 繰 越 | 8679.68 |
| 合 計 | 1,1527.33 |

[後期繰越金には本年度收入差引剩餘金 593.27 を
含む]

(ハ) 財産目録(昭和 17 年 Ⅳ 月 7 日現在)

| | |
|----------|-----------|
| 第 一 部 | |
| 定期預金 | 5700.00 |
| 服部資金 | 919.45 |
| 銀行當座預金 | 308.66 |
| 振替貯金 | 1386.33 |
| 郵便貯金 | 330.51 |
| 現 金 | 34.73 |
| 小 計 | 8679.68 |
| 第 二 部 | |
| 公債(三分半利) | 2500.00 |
| 約束郵便擔保金 | 40.00 |
| 小 計 | 2540.00 |
| 第 三 部 | |
| 印刷物版權 | 2500.00 |
| 天文月報 | 920.00 |
| 學會要報 | 300.00 |
| 寫眞繪葉書 | 15.00 |
| 寄贈交換圖書 | 145.00 |
| 天體寫眞及幻燈板 | 15.00 |
| 家 屋 一 棟 | 130.00 |
| 小 計 | 4025.00 |
| 總 計 | 1,5254.68 |

天 象 欄

流星群 VI 月は著しい流星群はない。月末の大熊座及び龍座から輻射するものはウィンネッケ彗星と關聯したものである。

變光星 次の表はVI月中に起る主なアルゴル種變光星の極小の中2回を示したものである。長週期變光星の極大の月日は本誌第 34 卷第 199 頁にある。本月中に極大に達する筈の星で観測の望ましいものは RCnc, RT Cyg, RTri, TUMa 等である。

| | | | | | |
|-----|----------------|-----------------|------|-------|------|
| | 赤 | 經 | 赤 緯 | 輻射點 | 性質 |
| 下 旬 | 1 ^h | 36 ^m | +43° | o And | 速, 痕 |
| 月 末 | 14 | 12 | +53 | γUMa | 緩 |
| 月 末 | 15 | 12 | +58 | ιUMa | 緩 |

| ア ル ゴ ル 種 | 範 圍 | 第二極小 | 週 期 | 極 小 | | D | d |
|-----------|----------|---------|-----|--------------------|--|------|------|
| | | | | 中 央 標 準 時 | | | |
| 023969 | RZ Cas | 6.3-7.8 | — | 1 ^h 4.7 | 11 ^d 0 ^h , 16 ^d 23 ^h | 4.8 | 0 |
| 204834 | Y Cyg | 7.0-7.6 | 7.6 | 2 23.9 | m ₂ 14 22, m ₂ 17 22 | 7 | 0 |
| 175315 | Z Her | 7.2-8.0 | 7.4 | 3 23.8 | 7 19, 11 19 | 9.6 | <0.2 |
| 182612 | RX Her | 7.2-7.9 | 7.8 | 1 18.7 | 11 23, 19 2 | 4.8 | 0.7 |
| 145508 | δ Lib | 4.8-5.9 | 4.9 | 2 7.9 | 10 21, 17 20 | 13 | 0 |
| 171101 | U Oph | 5.7-6.4 | 6.3 | 1 16.3 | 12 19, 17 20 | 7.7 | 0 |
| 191419 | U Sge | 6.5-9.4 | — | 3 9.1 | 10 21, 21 1 | 12.5 | 1.4 |
| 194714 | V505 Sgr | 6.4-7.5 | — | 1 4.4 | 9 0, 14 22 | 5.8 | 0 |
| 191725 | Z Vul | 7.0-8.6 | 7.1 | 2 10.9 | 12 23, 17 21 | 11.0 | 0 |

D—變光時間 d—極小繼續時間 m₂—第二極小の時刻

東京(三鷹)に於ける星の掩蔽(VI 月)

(東京天文臺回報第 173 號に據る。表の説明に關しては本誌 1 月號參照)

| 日附 | 星名 | 光度 | 現象 | 月齡 | 中央標準時 | | a | b | 方向角 | | 日附 | 星名 | 光度 | 現象 | 月齡 | 中央標準時 | | a | b | 方向角 | |
|----|-------------------|------------------|----|-------------------|------------------------|-------------------|-------------------|------|------|----|-------------------|------------------|----|------------------|------------------------|------------------|-------------------|------|-----|-----|---|
| | | | | | h | m | | | P | V | | | | | | h | m | | | P | V |
| 1 | 173 B. Sagittarii | ^m 6.3 | R | ^a 17.3 | ^{h m} 22 30.7 | ^m -0.6 | ^m +2.2 | 317° | 359° | 19 | A Leonis | ^m 4.6 | D | ^a 5.6 | ^{h m} 21 20.9 | ^m 0.0 | ^m +0.3 | 131° | 75° | | |
| 1 | 171 B. Sagittarii | 6.1 | R | 17.3 | 22 37.6 | -1.0 | +1.3 | 349 | 30 | 23 | 72 Virginis | 6.1 | D | 9.7 | 22 5.1 | -1.2 | +0.4 | 129 | 87 | | |
| 2 | 190 B. Sagittarii | 5.4 | R | 17.5 | 2 19.4 | -1.6 | +1.0 | 256 | 254 | 23 | l Virginis | 4.8 | D | 9.7 | 23 5.7 | -1.4 | -6.9 | 36 | 348 | | |
| 18 | B.D. +13° 12066 | 8.3 | D | 4.6 | 20 45 | — | — | 160 | 104 | 29 | 266 B. Sagittarii | 6.1 | R | 15.7 | 21 52.6 | -1.4 | +0.7 | 261 | 298 | | |

VI 月の太陽・月・惑星及び星座

主として東京天文臺編纂理科年表に據る。時刻は凡て中央標準時、出入、雨中は東京に於けるもの、時差は眞太陽時から平均太陽時を引いたものである。

太陽 牡牛座から双子座に進む。正午に於ける位置は 1 日には赤經 2 時 33 分、赤緯北 21 度 57 分で、30 日には赤經 6 時 34 分、赤緯北 23 度 13 分である。時差は夫々 +2 分 28 秒及び -3 分 19 秒である。日の出は 1 日が 4 時 25 分、30 日が 4 時 28 分、入は夫々 18 時 56 分、19 時 1 分である。22 日 10 時 17 分夏至となる。この頃は一年を通じて晝間の長さ最も長く、14 時間 35 分に達する。11 日は入梅である。

月 1 日には蛇遺座と射手座の境附近にあつて月齡 17、20 時 56 分に出て翌 2 日 7 時 26 分に没する。6 日 6 時 26 分下弦、14 日 6 時 2 分朔、22 日 5 時 44 分上弦、28 日 21 時 9 分望となる。この間赤緯は 1 日最南で 7 日に赤道を北へ通過し 15 日最北、22 日赤道を南に越えて 28 日再び最南となる。地球からの距離は 14 日 4 時が最遠で 1.05790、28 日 10 時が最遠で 0.92954 である。

水星 前月 31 日牡牛座で留となり光度 1.7 等であつた。以後逆行をはじめ 11 日は遠日點を通り光度は 3.0 等。13 日内合、以後は明方の星になる、25 日には再び留となつて以後は順行にうつる。今月半ばは太陽に近く觀望に適しない。月末の光度は 1.3 等である。

金星 牡羊座の南部から牡牛座に進んでゐる。10 日の出は 2 時 20 分、30 日の出は 2 時 14 分、日の出に先立つこと夫々 2 時間餘りであつて、光度は -3.6 等乃至 -3.4 等。曉の明星として東天に輝く、視半徑は 8.0 秒乃至 6.7 秒である。

火星 双子座から蟹座を順行中である。光度は 2.0 等

で、入は 10 日が 21 時 39 分、30 日が 21 時 1 分て日没後夫々 2 時間 43 分及び 2 時間 1 分である。漸次太陽に近くなりつゝある。視半徑は 2.0 秒である。

木星 双子座にあるが太陽に近くて觀望に適しない。即ち 10 日の出は 5 時 15 分、入は 19 時 44 分、30 日は 4 時 16 分に出て 18 時 45 分に入る。この間 26 日に合となる。光度は -1.4 等。

土星 牡牛座にある。先月の末に合となつたばかりで、月はじめは太陽に近いが、10 日の出は 3 時 40 分、30 日の出は 2 時 30 分となり、これから明方の觀望が出来るやうになる。光度は 0.3 等。視半徑は 7.4 秒である。

天王星 牡牛座を順行中である。月はじめ太陽に近いがだんだん太陽から離れて来る。10 日の位置は赤經 3 時 57 分 34 秒、赤緯北 20 度 17.8 分、30 日は赤經 4 時 2 分 4 秒、赤緯北 20 度 30.8 分である。10 日の出は 3 時 24 分、30 日の出は 2 時 9 分、光度は 6.1 等である。

海王星 乙女座にある。月はじめ逆行中であるが 8 日留となりその後順行にうつる。10 日の位置は赤經 11 時 51 分 26 秒、赤緯北 2 度 22.3 分、30 日は赤經 11 時 51 分 52 秒、赤緯北 2 度 18.7 分である。南中時は夫々 18 時 20 分、17 時 2 分、夜半に没する。光度は 7.8 等。

プルート 相變らず蟹座にある。10 日の位置は赤經 8 時 30.4 分、赤緯北 23 度 47 分で、漸次太陽に近くなる。光度は 14 等。

星座 西の空には馭者や双子が冬の名残りに弱く隣いて、蟹、獅子、海蛇、コップもやがてその後を追つて行く。天頂附近には冠、牛飼、獵犬、ヘルクレス、南天には乙女、鳥、ケンタウルスなどが梅雨晴れの空に仰がれる。北斗は既に傾いて、白鳥、琴、鷺、蛇遺ひ、蝸など銀河に浸る星座が昇つて来るのは、初夏の感を強める。

青寫眞變光星圖目錄 (1-75) (日本天文學會用)

定價 一枚 金拾錢, 送料十五枚毎に金四錢

型, (N) は肉眼, 双眼鏡用, (A) は口径四糎程度用, (B) は口径八糎程度用,
(A, B) は何れにも用ひられるもの。申込の際は番號にて申込の事。

| 番號 | 型 | 星名 | 種類 | 變光範圍 | 番號 | 型 | 星名 | 種類 | 變光範圍 |
|----|-------|---------------------------------------|-------------------------|----------------------------------|----|-------|-----------------------------|----------------------|-----------------------------------|
| 1 | (A) | { R CrB RU Her | 不規則 長週期 | 5.9-15.0 7.0-14.2 | 34 | (N) | β Peg | 不規則 | 2.2-2.7 |
| 2 | (B) | R CrB | 不規則 | 5.9-15.0 | 35 | (N) | { L ² Pup V " | 長週期 β Lyr | 3.1 6.3 4.1-4.8 |
| 3 | (A) | AC Her | RV Tau | 7.2-9.0 | 36 | (A) | W Cyg | 長週期 | 5.1-7.0 |
| 4 | (A) | U Hya | 不規則 | 4.5-6.3 | 37 | (A) | TX Dra | " | 6.7-8.0 |
| 5 | (A) | AB Aur | R CrB | 7.2-8.4 | 38 | (A) | { Z Aqr W Cet | " " | 7.2-9.8 6.5-14.5 |
| 6 | (A) | R Set | RV Tau | 4.5-9.0 | | | T " | " | 5.2-6.0 |
| 7 | (A) | { AF Cyg AW " | 長週期 ? | 6.4-8.4 8.0-10.2 | 39 | (B) | W Cet | " | 6.5-14.5 |
| 8 | (A,B) | T Her | 長週期 | 6.9-13.7 | 40 | (A) | RS Cnc | " | 5.3-6.8 |
| 9 | (A,B) | T Cas | " | 6.7-12.5 | 41 | (A) | V UMi | " | 7.1-8.8 |
| 10 | (A,B) | U Cyg | " | 6.1-11.8 | 42 | (A) | Z UMa | RV Tau | 6.8-8.7 |
| 11 | (A,B) | { T UMa RS " S " | " " " | 5.5-13.0 8.2-14.5 7.0-12.9 | 43 | (A) | U Mon | 長週期 | 5.6-7.3 |
| 12 | (A,B) | R Aqr | " | 5.8-10.8 | 44 | (A) | { TT Cyg X " | " " | 7.3-8.7 4.2-14.0 |
| 13 | (A) | CH Cyg | " | 6.4-7.4 | 45 | (B) | RS Oph | 新星 | 4.3-<12.0 |
| 14 | (A,B) | S CrB | " | 6.0-13.4 | 46 | (B) | AC And | RR Lyr? | 10.0-11.6 |
| 15 | (A) | S Her | " | 5.9-13.1 | 47 | (A) | RS " | 不規則 | 7.0-9.0 |
| 16 | (B) | " | " | " | 48 | (A) | Ru Cep | RV Tau | 8.3-9.3 |
| 17 | (N) | o Cet | " | 2.0-10.1 | 49 | (A) | SS Cep | 長週期 | 6.7-7.8 |
| 18 | (A) | { R Cet o Cet | " " | 7.0-13.3 2.0-10.1 | 50 | (A) | U Ori | " | 5.4-12.2 |
| 19 | (B) | o Cet | " | 2.0-10.1 | 51 | (A) | " | " | " |
| 20 | (B) | R Cet | " | 7.0-13.8 | 52 | (B) | " | " | " |
| 21 | (N) | α Cas | 不規則 | 2.1-2.6 | 53 | (A) | Y Tau | " | 6.5-8.9 |
| 22 | (N) | { ρ Per " " | アルゴル 不規則 | 2.2-3.5 3.3-4.1 | 54 | (A) | R Dra | " | 6.4-13.0 |
| 23 | (\) | λ Tau | アルゴル | 3.8-4.1 | 55 | (B) | " | " | " |
| 24 | (N) | { ϵ Aur " " | " " | 3.1-3.8 3.9-4.1 | 56 | (A,B) | T Aqr | " | 6.8-13.5 |
| 25 | (N) | { α Ori γ Gem " " | 不規則 長週期 短週期 | 0.1-1.2 3.2-4.2 3.7-4.1 | 57 | (A,B) | R UMa | " | 5.9-13.6 |
| 26 | (N) | R CMa | アルゴル | 5.4-6.0 | 58 | (A,B) | R Ser | " | 5.6-13.8 |
| 27 | (N) | δ Lib | " | 4.8-5.9 | 59 | (A) | R Gem | " | 6.5-14.3 |
| 28 | (\) | { η Her α " u " | 不規則 " β Lyr | 4.4-5.6 3.1-3.9 4.6-5.3 | 60 | (B) | { Z Gem TW " | 變光星? ?" | 9.5-12.8? 7.7-9.3 |
| 29 | (N) | { U Oph Y " | アルゴル 短週期 | 5.7-6.4 6.2-7.0 | 61 | (A) | V CVn | 長週期 | 6.4-8.9 |
| 30 | (N) | { X Sgr W " Y " | " " " | 4.4-5.0 4.3-5.1 5.8-6.6 | 62 | (A,B) | RS Lib | " | 6.7-13.0 |
| 31 | (N) | { β Lyr R " d Ser | β Lyr 不規則 " | 3.4-4.3 4.0-4.5 4.9-5.6 | 63 | (A,B) | S Scl | " | 6.3-13.4 |
| 32 | (N) | { U Aql η " S Sge | 短週期 " " | 6.3-7.0 3.7-4.4 5.4-6.1 | 64 | (A) | { R Scl RS " R Hya | " 未知 長週期 | 6.2-8.8 10.3-<11.0 3.5-10.1 |
| 33 | (N) | { μ Cep δ " RU Cas | 不規則 短週期 ?" | 4.0-4.8 3.7-4.4 5.7-5.9 | 65 | (\) | { SS " TV " TV Aur | 變光星? アルゴル? 不規則 | 7.4-8.1? 6.9-7.4 7.3-9.2 |
| | | | | | 66 | (A) | TW Aur | " | 7.3-9.2 |
| | | | | | 67 | (A) | Y UMa | " | 7.7-9.3 |
| | | | | | 68 | (A) | TV UMa | " | 8.2-9.0 |
| | | | | | 69 | (N) | { RT Aur WW " UU " | 短週期 アルゴル 不規則 | 5.3-6.6 5.6-6.2 5.1-6.8 |
| | | | | | 70 | (A) | UX Aur | " | 8.0-8.8 |
| | | | | | 71 | (A) | Nova Her | 新星 | 1.3-14.5 |
| | | | | | 72 | (B) | " | " | " |
| | | | | | 73 | (B) | " | " | " |
| | | | | | 74 | (A) | T Cen | 長週期 | 5.6-9.0 |
| | | | | | 75 | (A,B) | RS Cyg | " | 6.8-10.3 |

東京府三鷹町東京天文臺構内
振替東京一三五九五番

日本天文學會

青寫眞變光星圖目錄 (76-150) (日本天文學會用)

定價 一枚 金拾錢, 送料十五枚毎に金四錢

型, (N) は肉眼, 双眼鏡用, (A) は口径四種程度用, (B) は口径八種程度用,

(A, B) は何れにも用ひられるもの. 申込の際は番號にて申込の事.

| 番號 | 型 | 星名 | 種類 | 變光範圍 " ^m —" ^m | 番號 | 型 | 星名 | 種類 | 變光範圍 " ^m —" ^m |
|-----|-------|------------------|-------------|--|-----|-------|-------------------|----------------|--|
| 56 | (A,B) | { T Aqr Y " | 長週期 | 6.8—13.5 8.3—15.0 | 111 | (A) | V505 Sgr | アルゴル | 6.4—7.5 |
| 76 | (A,B) | R Boo | " | 5.9—12.8 | 112 | (A) | { S Per T " | 長週期 不規則 | 7.2—12.2 8.9—9.0 |
| 77 | (A,B) | R Vir | " | 6.2—12.0 | 113 | (B) | S " | 長週期 | 7.2—12.2 |
| 78 | (A,B) | R Leo | " | 5.0—10.5 | 114 | (A,B) | T Tau | R CrB | 9.0—12.8 |
| 79 | (A) | R Lyn | " | 6.5—14.1 | 115 | (A,B) | T Ori | " | 9.7—12.8 |
| 80 | (B) | " | " | " | 116 | (A) | SS Cyg | U Gem | 8.1—12.0 |
| 81 | (A) | { R Cyg RT " | " | 5.6—14.4 6.3—12.9 | 117 | (B) | " | " | " |
| 82 | (B) | R Cyg | " | 5.6—14.4 | 118 | (A) | RY Sgr | R CrB | 6.1—14.0 |
| 83 | (B) | { RT Cyg TU " | " | 6.3—12.9 8.5—14.5 | 119 | (B) | " | " | " |
| 84 | (A) | V Cnc | " | 7.1—13.1 | 120 | (A) | U Gem | U Gem | 8.8—13.8 |
| 85 | (B) | " | " | " | 121 | (B) | " | " | " |
| 86 | (A) | { V CrB RR " | " | 6.9—12.4 7.2—8.4 | 122 | (A) | RR Lyr | RR Lyr | 7.2—8.0 |
| 87 | (B) | V CrB | " | 6.9—12.4 | 123 | (A,B) | { SZ Aql TT " | 短週期 | 9.4—11.4 8.4—9.6 |
| 88 | (A) | R Cam | " | 7.2—14.5 | 124 | (A) | S Sct | 長週期? | 7.0—8.0 |
| 89 | (B) | " | " | " | 125 | (A) | { X Per RW Tau | R CrR? アルゴル | 6.0—6.6 8.1—11.5 |
| 90 | (A,B) | R LMi | " | 6.3—13.0 | 126 | (A) | T Mic | 長週期 | 7.1—8.5 |
| 91 | (A,B) | T Cep | " | 5.2—10.8 | 127 | (A) | W UMa | 食 | 8.3—9.1 |
| 92 | (A) | S Cep | " | 7.0—12.9 | 128 | (A,B) | { RT Hya VZ " | 長週期 アルゴル | 7.1—9.3 9.1—9.9 |
| 93 | (B) | " | " | " | 129 | (A) | T Cam | 長週期 | 7.0—14.1 |
| 94 | (A) | R And | " | 5.6—14.7 | 130 | (B) | " | " | " |
| 95 | (B) | " | " | " | 131 | (B) | R Aur | " | 6.5—13.9 |
| 96 | (A) | RR Sgr | " | 5.8—13.3 | 132 | (B) | " | " | " |
| 97 | (B) | " | " | " | 133 | (A) | R Cas | " | 4.8—13.6 |
| 98 | (A) | { R Sgr S " | " | 6.7—13.3 7.7—15 | 134 | (B) | " | " | " |
| 99 | (B) | R Sgr | " | 6.7—13.3 | 135 | (A) | Nova Lac | 新星 | 1.9—<16 |
| 100 | (B) | S Sgr | " | 7.7—15 | 136 | (B) | " | " | " |
| 101 | (A) | R Peg | " | 6.9—13.5 | 137 | (B) | Z Cam | Z Cam | 9.6—13.3 |
| 102 | (B) | " | " | " | 138 | (B) | RX And | " | 10.3—13.6 |
| 103 | (A) | { U Cep RX " | アルゴル 不規則 | 6.8—9.2 7.4—7.8 | 139 | (A) | R Tri | 長週期 | 5.3—12.0 |
| 104 | (A) | U Sge | アルゴル | 6.5—9.4 | 140 | (B) | " | " | " |
| 105 | (A) | { RZ Cas SU " | 短週期 | 6.3—7.8 6.0—6.4 | 141 | (A) | V Mon | " | 6.0—14.0 |
| 106 | (A) | RX Her | アルゴル | 7.1—7.9 | 142 | (B) | " | " | " |
| 107 | (A) | Z Vul | " | 7.0—8.6 | 143 | (A,B) | RU Cyg | " | 6.9—10.2 |
| 108 | (A) | YZ Cas | " | 5.7—6.1 | 144 | (A,B) | V Boo | " | 6.4—11.4 |
| 109 | (A) | { WW Aur RT " | 短週期 | 5.6—6.2 5.3—6.6 | 145 | (A) | U Per | " | 7.0—11.7 |
| 110 | (A) | AR Lac | アルゴル | 7.0—7.8 | 146 | (B) | " | " | " |
| | | | | | 147 | (A) | W Her | " | 7.4—13.9 |
| | | | | | 148 | (B) | " | " | " |
| | | | | | 149 | (B) | R Mon | R CrB | 9.3—14.0 |
| | | | | | 150 | (B) | SU Tau | " | 9.5—<15 |

東京府三鷹町東京天文臺構内
振替東京一三五九五番

日本天文學會

東京天文臺繪葉書

(コロタイプ版) 定價 4枚1組 金 20 錢
送料 4 組迄 金 4 錢

- 第一集 子午儀, 時計室, 子午環, 子午環室
- 第二集 天頂儀, 聯合子午儀室, 20 櫃赤道儀, 20 櫃赤道儀室
- 第三集 65 櫃赤道儀室, 65 櫃赤道儀, 65 櫃赤道儀の一部(其1及其2)
- 第四集 塔望遠鏡, 塔望遠鏡シーロスタット, 20 櫃天體寫真儀及 13 櫃太陽寫真儀, 20 櫃彗星搜索鏡
- 第五集 絶 版

プロマイド天體寫真

(繪葉書型) 定價 1 枚に付 金 15 錢
送料 凡そ 28 枚迄 金 4 錢

- 1. 水素 α 線にて撮りたる太陽, 2. 月面アルプス山脈, 3. 月面コペルニクス山, 4. オリオン座大星雲, 5. 琴座の環状星雲, 6. 白鳥座の網状星雲, 7. アンドロメダ座の網状星雲, 8. 獵犬座の渦状星雲, 9. ヘルクレス座の球状星團, 10. 1919 年の日食, 11. 紅焰及光芒, 12. 73 吋反射望遠鏡, 13. 100 吋反射望遠鏡, 14. エルケス大望遠

- 鏡とアインシュタイン氏, 15. モーフハウス彗星, 16. 北極附近の日週運動, 17. 上弦の月, 18. 下弦の月, 19. 土星, 20. 太陽, 21. 大熊座の渦状星雲, 22. 乙女座紡錘状星雲, 23. ベガヌス座渦状星雲の集合, 24. 大熊座島星雲, 25. 小狐座歪鈴星雲, 26. 一角獣座變形星雲, 27. 蛇遺座 S 字状暗黒星雲, 28. アンドロメダ座大星雲, 29. 牡牛座アレアデス星團, 30. ウイルソン山天文臺 150 呎塔形望遠鏡, 31. ウィンネツケ彗星, 32. 東京天文臺 8 吋赤道儀室, 33. 同子午環室, 34. 1929 年の日食, 35. 太陽黒點 (1920 年 3 月 21 日), 36. 月 (月齢 26), 37. オリオン座の暗黒星雲, 38. 日食の閃光スペクトル (1932 年), 39. 1932 年の日食, 40. 紅焰, 41. 火星, 42. 木星, 43. ハリー彗星, 44. 日食のフラッシュ・スペクトル (1934 年), 45. コロナ (1934 年 2 月 14 日の日食), 46. ヘルクレス座新星, 47. コロナ (1936 年 6 月 19 日の日食).

青寫真變光星圖

(自1-至150) 定價 1 枚に付 金 10 錢
送料 15 枚迄 金 4 錢

御注文の節は定價に送料を添へ 適宜の方法にて本會迄御送金願ひます。

昭和 17 年 5 月 25 日 印刷
昭和 17 年 6 月 1 日 發行

定價 金 30 錢
(郵 稅 5 厘)

編輯兼發行人

東京府北多摩郡三鷹町東京天文臺構内

福 見 尙 文

印 刷 人

東京市神田區美土代町 16 番地

嶋 富 士 雄

印 刷 所

東京市神田區美土代町 16 番地

株式會社 三 秀 舎

發 行 所

東京府北多摩郡三鷹町東京天文臺構内

社 團 日 本 天 文 學 會
法 人

振替口座 東京 13595

配 給 元 東京市神田區淡路町二丁目九 日本出版配給株式會社

THE ASTRONOMICAL HERALD

VOL. XXXV NO. 6

1942

June

CONTENTS

S. Imoto: On the Old Star Atlas of Nippon.

Supplement (Original).....67

T. Sato: On the Yonakuni Eclipse Camp

(Report)69

Abstracts and Materials—Report of the Society—Sky of June 1942